The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Non-Hodgkin's lymphoma of the pleural cavity developing from long-standing pyothorax : Summary of clinical and pathological findings in thirty-seven cases
Author(s)	井内, 敬二
Citation	大阪大学, 1993, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38617
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【 46 】

氏　　名	井　内　敬　二（いうちけいじ）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学位記番号	第　10907　号
学位授与年月日	平成5年9月17日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	Non-Hodgkin's lymphoma of the pleural cavity developing from long-standing pyothorax: Summary of clinical and pathological findings in thirty-seven cases **(慢性膿胸に合併する非ホジキンリンパ腫37例の臨床的，病理組織学的検討)**
論文審査委員	(主査) 教授　松田　暉 (副査) 教授　岸本　忠三　　教授　青笹　克之

論文内容の要旨

【背景及び目的】

結核性胸膜炎および肺結核に対して行なわれた人工気胸術より生じた慢性膿胸は，現在でも数少ない結核関連外科的疾患のひとつである。ところがまったく異なる疾患である非ホジキンリンパ腫が膿胸腔に近接して発生した3例を経験した。慢性膿胸合併悪性腫瘍の自験例およびそれまでの本邦報告例を分析すると非ホジキンリンパ腫が圧倒的に多く，これは新しい疾患概念と考えられる。1988年末まで，著者の調べ得た慢性膿胸合併非ホジキンリンパ腫の本邦報告例は39例であった。一方欧米文献には本症についての報告は見られない。そこで本研究は，両者合併例の全国集計を試み，その臨床像と病理組織学的検討から本症の特徴を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】

1972年から1988年まで国立療養所近畿中央病院（6例），および関連協力施設（17例）に入院した23例，同期間の胸部疾患関連学会記事からの症例（7例），1978年から1987年までの日本病理剖検報の症例（7例）の合計37例の慢性膿胸に合併したと考えられる非ホジキンリンパ腫症例を対象とした。各々につき肺結核，胸膜炎の既往，人工気胸術施行の有無，臨床所見，腫瘍の発生部位，胸部X線写真，CT像の特徴を各施設に調査を依頼し集計した。非ホジキンリンパ腫の診断は31例では生検で行なわれ，6例は剖検で確認された。

組織標本は10%ホルマリン固定後，パラフィン包埋し，ヘマトキシリン・エオジン染色を行なった。腫瘍の組織学的分類は非ホジキンリンパ腫のWorking Formulation（1987年）にしたがって分類した。さらに腫瘍細胞の性状を調べる目的でパラフィン包埋標本（26例）及び新鮮凍結標本（3例）について免疫組織学的検討を行った。5例では細胞浮遊液を用いて表面形質の検討を行なった。

【成　績】

国立療養所近畿中央病院で1972年から1988年までに経験した慢性膿胸165例のうち，膿胸壁に接して発生した悪性腫瘍は11例で6.6%に相当した。そのうち非ホジキンリンパ腫は6例であり3.6%の頻度であった。他は肺扁平上皮癌が2例であり，血管肉腫，悪性胸膜中皮腫，悪性線維性組織球腫がそれぞれ1例であった。集計した慢性膿胸に合併し

た非ホジキンリンパ腫37例の臨床像は以下のとおりであった。1）診断時年令は46から81歳（平均　63歳）であった。2）男女比は5.2：1（31：6）で，これは1972年から1988年までの当院の慢性膿胸症例165例の男女比2.6：1（120：45)に比し男性に多い傾向が見られたが統計学的に有意ではなかった($p<0.25$)。3）既往症としては27例（73.0%）は人工気胸術を受け，胸膜炎既往6例（16.2%），胸廓成形術をうけたもの3例（8.1%）（1例は人工気胸術も同時に受けていた),肺結核既往のみ1例,その他1例であった。同時期の当院の慢性膿胸165例の原因は胸膜炎後66例（40%），人工気胸術後59例（35.8%），肺切除術後14例（8.5%），外傷後6例（3.6%），充塡術後6例（3.6%），その他14例（8.5%）であり，非ホジキンリンパ腫発生例は我々の経験した慢性膿胸症例と比較すると人工気胸術を受けたものに多く見られた（$p<0.01$)。4）人工気胸術施行または胸膜炎罹患等から非ホジキンリンパ腫発生までの期間は22～55年（平均33年）であった。5）初診時症状は通常慢性膿胸には見られない胸痛，有痛性胸壁腫瘤をそれぞれ19例（51%），5例（14%）に認めた。6）腫瘍の発生部位は胸壁が28例（75.7%），肺が5例（13.5%），胸膜が4例（10.8%）と膿胸腔に接する胸壁に多く見られた。7）腫瘍は胸部X線写真では37例中13例（35%）で，CTスキャンでは撮影できた31例中24例（77%）で読影可能であった。

31例の生検材料，6例の剖検材料によって病理組織学的に検討した。その結果1）diffuse large cell typeは30例（81%）で，このうちimmunoblastic typeが22（59%），non-cleaved cell typeが6（16%），cleaved cell typeが2（5%)であった。diffuse lympho-plasmacytic typeは5例（14%）で2例（5%）は分類不能であった。2）免疫組織学的マーカーではB-cell typeが32例T-cell typeが1例，4例は検索不能あった。3）剖検が行なわれた23例中11例（48%）で腫瘍は胸腔内に限局していた。

【総　括】

1）慢性膿胸患者に比較的高率に併発する膿胸腔に接する胸壁や肺の非ホジキンリンパ腫発生について分析した。2）男女比は5.2：1と男性に発生頻度が高かったが，自験慢性膿胸における男女比2.6：1とは統計学的に有意の差はなかった。3）非ホジキンリンパ腫発生例における慢性膿胸の原因としては人工気胸術が75.6%と多くを占めた。4）腫瘍発生は人工気胸術，胸膜炎罹患後22～55年（平均33年）であった。5）腫瘍は膿胸腔に接した胸壁に75.7%と最も多く,次いで肺(13.5%)，胸膜（10.8%）であった。6）免疫組織学的検索ではほとんどがB細胞性リンパ腫であった。

論文審査の結果の要旨

結核性胸膜炎は人工気胸術後に生じた慢性膿胸患者において膿胸腔内または隣接して非ホジキンリンパ腫が発生した症例の経験から，両疾患の病因的関連性が推察された。そこでかかる非ホジキンリンパ腫の臨床的，病理学的特徴を全国調査で集計した37例をもとに検討した。その結果，慢性膿胸に併発した胸部非ホジキンリンパ腫は通常の慢性膿胸には見られない胸背部の痛みが特徴的であり，診断には胸部CTが有用であることを示した。本腫瘍の発生は結核性胸膜炎や人工気胸術後平均33年で，背景として人工気胸術後が結核性胸膜炎に比して有意に多いことが明らかとなった。更に病理組織学的にはほとんどdiffuse large cell, immunoblastic typeが大半を占め，免疫組織学的にはほとんどがB-cell typeであることも明らかとなった。本研究は，慢性膿胸による胸膜の長期慢性刺激がかかる非ホジキンリンパ腫発生に関連性することをはじめて示唆し，また多数例についてその臨床像を明らかにしたものであり，学位の授与に値すると考える。